社会イノベーション研究　第 14 巻第 1 号（119-126）2019 年 3 月　　2019 年 2 月 4 日掲載承認

ユーモアと humour をめぐって
―笑い，文化，言語コミュニケーションに関する覚書―

A Note on Laughter, Cultures and Linguistic Communication: Differences Between *Yumoa* and *Humour*

成城大学社会イノベーション学部教授
川村晶彦 KAWAMURA, Akihiko

1. はじめに

人は共に笑うことでお互いの距離を縮め，連帯感を強めることもできる（cf. Brown & Levinson, 1978）。その意味で，笑いは人間のコミュニケーションにおいて重要な対人的機能を果たしていると言える。一方，何をおかしいと感じるかという点で，その基準は決して普遍的なものではなく（Laughlab, 2002），個別文化における相違が異文化間コミュニケーションの障壁ともなり得る。本小論では，笑いに対する文化間の相違が深刻な誤解を生じる例として, 日本の文化[1)]におけるユーモアと西洋の文化における humour を概観した後，日本の大学生の笑いに対する反応を語用論的失敗（Thomas, 1983）および外国語教育の観点から考察する。

2. 笑いとコミュニケーション

2.1. 語用論的失敗と悪い冗談

語用論的失敗とは，話し手の母語からの負の転移あるいは聞き手側の話し手の母語に対する知識の欠如から, 語用論レベルでの齟齬が生じ, コミュニケーションが阻害される状態を指す。トマスによると，語用論的失敗とその他の言語的誤り，たとえば発音の誤りや文法的間違いは以下の点で決定的に異なる。すなわち，間違いや誤りが生じた際に聞き手にそう認識されるか否かという点である。通常，発音や文法の間違いが生じた場合，母語話者であれば，それが単なる言語上の問題であるということにすぐ気がつくが，語用論的失敗の場合は，それが話し手の意図的な発言であると誤解をされてしまい，特定の民族等に対するステレオ・タイプを形成するという危険性が指摘されている（Thomas, 1983）。

以下は語用論的失敗の例である（Leech & Thomas, 1987/91 より構成）：

教師（英国人）：..., would you like to read this passage?

生徒（非英語母語話者）：No, thank you.

上記の例で，教師は would like を用いた疑問文で生徒に教科書を音読するように「指示」をしているが，生徒は音読をしたいかどうか自分の意思を尋ねる「質問」と解釈し，それを断っている。教師は，仮に生徒であっても高圧的になりすぎないように意思を尋ねる「丁寧」な疑問文として指示を出し, 生徒の側も失礼にならないよう配慮し，「丁寧」な断りの表現を用いている。質問に対して返答をし，お互いに相手に対する配慮も示していることからは，一見コミュニケーション上の問題はないようにも見えるが，発話行為のレベルで

言うと，指示を質問と誤解している点で，発話行為の３つのレベルのうち発語内行為を正確に理解できていない。この例では，生徒はあくまでも言語的な知識の欠如から教師の意図を読み違えただけであるが，上述のように，発音や文法の誤りであれば聞き手にすぐに認識できるものの，語用論レベルの失敗は，それが話し手の意図であると解釈されてしまう危険性が高い。教師の指示を拒否するというだけでも，教室における教師と教え子のやりとりとしては不適切と判断されても仕方のない行為であるが，それに加えて，質問に対しては丁寧な返答となるであろう上記の生徒の発言が指示に対しては極めて不適切に響く可能性が高い。リーチとトマスは，結果として，教師はこの生徒のことを無礼な生徒，あるいはこの発言を悪い冗談と解釈してしまうかもしれないと続けている（*ibid.*）。

ここで，無礼であるということと悪い冗談とが同レベルのものとして並べられている点も見逃してはならない。本来であれば，前者は人間の性質や振る舞いについての否定的判断であり，後者はあくまでも特定の冗談に対する否定的判断のはずであるが，悪い冗談を言う人間は無礼であるという前提がここにはあるようである。本小論の冒頭で述べたように，人は共に笑い，お互いの距離を縮めることができる一方で，それが失敗した場合に相手の人格に対しても否定的な評価を下すこともあるということである。言い方を変えれば，時と場合によっては，冗談の成否はコミュニケーションの成否とも深く関わりかねないということである。

2.2. 個別文化の影響と透明性の錯覚

コミュニケーションにおける笑いの機能をポライトネスという観点からも見直したのがブラウンとレヴィンソンであるが，彼らの提唱したフェイス理論は文化普遍性を謳う一方で，特に東洋文化が十分に考慮されていないという批判もある（Matsumoto, 1988；Gu, 1990）。実際問題として，笑いに限らず，コミュニケーションと文化とは密接に関わっており，重複または相即不離とさえ言ってよいであろう（cf. 板場, 2010）。何をおかしいと感じるか，という点で個別文化における違いが大きいことは想像に難くない。日米の文化を例にとってみると，サカモトとサカモトは日本文化においては場面によって笑いそのものが好まれず，米文化では同じ場面であっても笑いが好まれると指摘している（Sakamoto & Sakamoto, 2004）。彼らはポライト・フィクションと呼ばれる個別文化における言動の枠組み[2]の１つとして‘You and I are relaxed’（Sakamoto & Sakamoto, 2004：14-8）を挙げ[3]，米文化においては，人はリラックスした状態が基準であり，緊張する場面ではその緊張をほぐす，あるいは緊張するような場面でもその緊張をしっかりとコントロールできているということを周りに示すためにも冗談を言うと説明している。一方，日本人はビジネスの場面等ではむしろ緊張を好み，そういった場面で冗談を言う米国人に対して不真面目といった否定的感情を抱くと説明されている。こういった笑いに対する日米の意識の違いは日米のコミュニケーションにおいても強く影響を与える可能性が高い。

リーチとトマスの例も，サカモトとサカモトが指摘した日米で異なる冗談に対する反応も，話し手の意図，つまり発語内行為が聞き手に正確に認識されていないという点で共通である。生徒は教師に対して悪い冗談を言ったつもりはなく，丁寧に質問に答えたつもりであり，米国人も緊張をほぐすために冗談を言うのであるが，どちらも話し手の人格に対する否定的評価へとつながっている。ミラーは，コミュニケーションにおける誤解の原因として最も多く見られるものは意図の取り違えであると指摘している（Miller, 1974）が，話し手と聞き手が異なる文化背景を持つ異文化間でのコミュニケーションではことさらそう言えるであろう。

こういった話し手と聞き手の意図の取り違えに関わっているのが透明性の錯覚（Gilovich, Savitsky & Medvec, 1998）と呼ばれる現象である。これは，話し手が実際よりも自身の内心を聞き手に理解されていると感じる傾向であり，話し

手と聞き手が同じ文化的尺度等を共有しない場合はそれだけでも相手の意図を誤解する可能性が高まると言える。話し手が自身の文化において期待される行動をとり，異なる文化に属する聞き手であっても理解してくれるだろうと思い込む一方で，実際には，異なる文化背景のためにお互いが相手を理解できないという状況が起こり得るからである。

2.3. ユーモアと humour

異文化間のコミュニケーションにおいて，笑いが誤解を生む原因となりうることはすでに述べたが，日本の文化におけるユーモアと西洋文化の humour は実際には異なるものであるにもかかわらず同一視されることが多く，特に西洋の文化に属する話者との間で誤解を生じる可能性が高い。以下は一般の日本語辞典による「ユーモア」の定義である：

> 人の心を和ませるようなおかしみ。上品で，笑いを誘うしゃれ。
>
> 『デジタル大辞泉』（小学館）
>
> 人を傷つけない上品なおかしみやしゃれ。
>
> 『精選版　日本国語大辞典』（小学館）

いずれの定義でも「上品」，「しゃれ」というキーワードが用いられており，文言は異なるものの，他者の心を和ませる，少なくとも傷つけないという性質に言及されている点を見逃してはならない。というのも，この他者に害をなさないという性質こそ，他者への攻撃性を備えた西洋の humour との一番大きな違いと言えそうだからである。日本のユーモアが他者を傷つけないものであるのに対し，humour の攻撃性は多くの研究者によって指摘されている（Dews et al., 1995；Colston, 1997；大島, 2006；岡本, 2013）。

左下の風刺画は，2020 年夏季オリンピックの開催地が東京に決定した 3 日後の 2013 年 9 月 11 日にフランスの『カナール・アンシェネ』紙に掲載されたものである。左手前のレポーターの発言は，文字通りには福島原発の事故のおかげで相撲がオリンピックの正式種目になったという架空の事由に対する祝辞である。さまざまな解釈が可能であろうが，背景にある黒煙を上げる壊れた施設は東日本大震災によって被害を被った福島原発を指し，相撲をとっている 2 人のやせ細った弱々しい力士の腕の数が 3 本，足の数が 3 本と描かれているのは放射能汚染の影響を示唆し，土俵際の審判やレポーターも防護服を身にまとっていることから，そのような状況にある日本が次のオリンピックの開催国に選ばれたことを批判的に表現しているのであろう。

この風刺画に対して，官房長官である菅義偉が日本政府として公式に抗議する構えを表明したことは海外でも広く報道されたが，特に西洋諸国では批判的な報道も見られた。たとえば，2013 年 9 月 12 日の『テレグラフ』紙は，日本では社会的な調和を重んじているため，風刺という文化が根付いておらず，だからこそ日本の官房長官が公式な抗議を検討するという事態になったのだと結論付けている。また，当事者である同紙の編集長ルイマリ・オロー自身，日本人にはユーモアの感覚がないと反論している。

> 「われわれには悪意のないように思える風刺画」に対する日本からの反応に「ただただ困惑している」
>
> ユーモアを表現しているからといって，被災者の皆さんを侮辱していることにはならない。ここ（フランス）では，悲劇に対してはユーモアを持って立ち向かうものだが，どうやら日本ではそうではないようだ
>
> （http://www.afpbb.com/articles/-/2967941
> （アクセス日 2019 年 1 月 31 日 18：38））

この風刺画に対しては，日本国内でも非常に反響があったが，そのほとんどが同紙に対する強い憤りであったことは記憶に新しい（cf. http://news.livedoor.com/article/detail/8065015/（アクセス日 2019 年 2 月 1 日 16：58））。同紙が悪意はないと主張する一方で，日本人は傷つき，憤り，そこに悪意を見出している。明らかに，日本の文化とフランスの文化の間でコミュニケーションが破綻をきたしている。その根底にあるものはユーモアと humour の違いと考えて間違いないであろう。

大島は風刺に代表される西洋の humour[4] の特徴の一つは，その攻撃性であると指摘し，特に男性が現代社会において持て余している攻撃性と humour との関連も示唆している（2006：27-31）。ちなみに，日本国内での同紙の風刺画に対する批判の中には，フランスの「ユーモア」そのものに対するものも目立った（https://blogs.yahoo.co.jp/tiger1tiger2stiger/38486421.html（アクセス日 2019 年 2 月 3 日 17：21））が，ユーモアと humour はそもそも異なるものであるため，日本人とフランス人がお互いのユーモアと humour を念頭に評価をくだそうとしても無理があると言わざるを得ない。

風刺という文化が日本には存在しない。したがって，日本人には西洋の文化を理解できないといった意見は海外のネット上で散見される（cf. https://www.metafilter.com/131904/Japan-does-not-have-a-vigorous-tradition-of-satire）が，米国人でありながら日本国内でお笑いをはじめ多方面で活躍しているパトリック・ハーランといった日本文化に精通しているはずの外国人からも日本には風刺が存在しないという声が聞かれる点は興味深い（https://headlines.yahoo.co.jp/article?a=20180511-00010000-newsweek-int&p=1（アクセス日 2018 年 5 月 11 日 14：37））[5]。

さて，この風刺画に対する日本の反応には，表現の自由への侵害であるという意見もあるが，この風刺画の作者であるジャン・カビュは 2015 年 1 月のシャルリー・エブド襲撃事件のきっかけともなったムハンマドの風刺画の作者でもあり，同事件でテロリストに襲撃され死亡している。どのような論理をもってしてもテロを正当化することはできないが，異なる文化背景を持つ人間の間では表現の自由として許されるか否かの基準そのものが異なるということは言えそうである。異文化間のコミュニケーションを考える上で見過ごしてはいけない点であろう。

2.4. 「世界で一番面白い」ジョーク

日本と外国の笑いの違いについて考える上で，ともすれば同一のものと認識してしまいがちなユーモアと humour の違いは重要な問題であるが，この 2 つの異なる概念を別にしても，異なる文化における笑いの基準というものはやはり相当な隔たりがあるに違いない。その意味で，2001 年にワイズマンが行った研究は非常に興味深い。心理学者であるワイズマンは，世界で一番面白いジョークを見つけるために大規模な調査を行った。この調査では，70 以上の国・地域から 40,000 ものジョークが出され，約 200 万人が面白いと思うジョークに投票を行った。以下が最終的に「世界で一番面白い」[6] と認定されたジョークである：

> A couple of New Jersey hunters are out in the woods when one of them falls to the ground. He doesn't seem to be breathing and his eyes have rolled back in his head. The other guy whips out his mobile phone and calls the emergency services. He gasps to the operator: "My friend is dead! What can I do? " The operator, in a soothing voice, says: "Just take it easy. I can help. First, let's make sure he's dead." There is a silence, then a shot is heard. The guy's voice comes back on the line. He says: "OK, now what?"
>
> （Laughlab, 2002：4）

このジョークの登場人物は 2 人のハンターであり，一方が倒れたために，もう一方が携帯電話で助けを求め，その際のアドバイスをどう解釈したかが笑いの鍵となっている。電話で助けを求めたハンターに対し，オペレーターが次のように言う：

First, let's make sure he's dead.

ここで make sure という成句が用いられているが，この成句は二義的であり，「確認する」あるいは「確実に何かをする」という 2 つの解釈が可能である。つまり，倒れた友人が死んでいるのか確認してください，という解釈と，倒れた友人を確実に殺してください，という解釈である。この二義性が笑いへとつながるのである。

上記のアドバイスをもらったハンターは，状況的に考えれば前者と解釈すべきであるところを，後者と解釈してしまった。一瞬の沈黙の後で銃声が後に続く。この恐るべき勘違いをしたハンターはオペレーターに再度問いかける，「次はどうすればいい」と。ただし，言うまでもなく，友人を「確実に」殺してしまった以上，次に打つべき手はもうない。死者は決して蘇らない。さらに，言うまでもなく，その死をもたらしたのは友人を助けようとしていたハンター本人に他ならないのである。

論者が初めてこのジョークを目にした時は，その残酷な勘違いに軽いショックを受けたが，友人を助けようとしているハンターのあまりにも愚かな勘違いと最後の質問とのギャップが非常に印象的であった。しかも，どういう勘違いをしたかは明示的には示されておらず，悲劇的な勘違いが起こったことを伝える手がかりは一瞬の沈黙の後に続く銃声だけである。その沈黙の間に，ハンターは何を思ったか。そして，なぜもう一方の解釈の可能性に目を向けなかったのか。

こういったコミュニケーションにおける二義性は，最初に頭に浮かんだ解釈が優先し，通常はもう一方の可能性が頭に浮かぶことはない（Thomas, 1983；cf. Kess & Hoppe, 1981）。さらに続けると，通常は，十分なコンテクストがある場合，二義性は決して曖昧模糊としたものではなく，話し手の意図は正確に聞き手に伝わるはずであるが，ここでは不運にも，両方の解釈を許す余地があり，友人の命を助ける上で最後の砦であったはずのハンターの理解力が決定的に欠如していたと言わざるを得ない。二義性に加えて，この愚かさがこのジョークの面白さを生んでいる。

さて，世界で最も多い得票を集めたこのジョークであるが，日本人にとっても「うける」であろうか。次節にて簡単な検証を試みたい。

2.5. 「世界一面白い」ジョークは日本人に受け入れられるか

ワイズマンによると，ジョークを面白いと感じる要素の一つに他者に対して優越感を感じられるというものがある（Laughlab, 2002）。本ジョークの場合はこれも当てはまるであろう。こんな愚かな人間がいるのか，という笑いである。

論者は 2017 年度に，担当する講義でこのジョークを扱い，学生に感想を求めてみたが，否定的な反応が大多数であった。そこで，2018 年度も論者の担当する異文化間コミュニケーションの講義にてアンケートの形で学生の意見を求めてみた。英語のジョークのため，学生の英語力も関わってくるが，アンケート実施に際して，鍵となる二犠牲をはじめ内容の解釈に関わるものは事前に解説を行った。余談になるが，冗談というものは冗談を言った本人がいったん解説を始めてしまうと面白さが損なわれてしまうのが常であり，今回の調査ではあくまでも客観的に冗談の質としての意見を問うている。なお，調査対象となった学生の個人情報の取扱いに関しては，学術研究として公表する上で当該個人情報の保護に適用される法令及びその他の規範は遵守する旨を伝え，了承の取れた学生のデータのみを用いている。当該科目名，回答人数等は以下の通りである：

科目名　異文化間コミュニケーション論 I
（第 14 回　2018 年 7 月 11 日）
調査対象　成城大学社会イノベーション学部
学部 2，3，4 年生　計 161 名

当該のジョークに関わる質問は以下の 3 つである：

1）上記の「世界一面白い」ジョークを面白いと評価できるかどうか。
2）理由。
3）日本人はどのようなジョークを好むと思うか。

1）の結果は以下の通り：

面白い　44 名

面白くない　117 名

2017 年度はアンケートを実施していないため，正確なデータは残っていないが，その年度の学生と比較すると「面白い」と感じた学生も多く感じるものの，約 73％もの学生が「面白くない」と回答している。ワイズマンはこのジョークには文化普遍的な面白さがあると指摘しているが，少なくとも日本の大学生には面白くないと感じる者が一定数以上いるようである。

1）の理由として，2）では，人の死などを冗談として扱うのは不謹慎である，残酷なジョークは好まないといった意見が多くみられた。それでは日本人大学生はどのような笑いを好むのか，という点で，3）には，誰も傷つかない冗談といった意見が多かった。この点は, 成城大学だけでなく, パイロット調査を行った神奈川県内の私立大学でも同じような傾向が見られた。ユーモアと humour の相違だけでなく, やはり笑いに関しては, 文化的好みが存在することは明らかで,「世界一面白い」ジョークも例外ではない。

3. まとめ

笑いに関して文化差が存在することはある程度まで予想できることであったが，1 でも触れたように，笑いはコミュニケーションにおいても重要な機能を果たしている。笑いに関して文化差が大きい場合は異文化間のコミュニケーションにおいても大きな障壁となり，語用論的失敗の原因となることも容易に予想可能である。では，たとえば外国語教育などで笑いについても指導すべきなのだろうか。これは非常に難しい問題であるが，特定の冗談や特定の傾向の冗談を面白いと感じるように指導するという意味であれば言語道断であろう。何をおかしいと感じるかは言うまでもなく個々の嗜好の問題であり，他人が口を出すべき問題ではない。トマスは次のように述べている：

> Students who feel that their view of the world is being dismissed out of hand or who feel unable to express themselves as they wish, are scarcely likely to develop positive attitudes toward learning foreign language.
>
> （Thomas, 1983：110）

何をおかしいと感じるか，には個人の世界観も当然含まれており，そういった点でたとえ教師とはいえ，他者の価値観を押し付けられた場合には元々の目標である外国語の学習に積極的な態度をとることは難しくなるであろう。

さらに，外国語教育は原則的に規範主義にのっとって行われているが，冒頭で述べたように，語用論的失敗は，文法や発音といった規範的に指導できるものとは異なり，母語話者であっても外国人学習者の語用論的失敗を認識することは困難である。話し手の意図という，規範的ではなく記述的にしか扱えない対象を扱っているからである。そのため，語用論的失敗というタームの提唱者であるトマスは失敗（failure）の代わりに「間違い」や「誤り」（mistake, error）といった語句を用いるのは避けるべきであると主張している。

笑いに関するものを含め，語用論的な指導を規範的なものに限るのであれば，その指導する対象はおのずと決まってくる。すなわち，目標言語の文化における笑いの傾向および笑いの機能である。目標言語の話者はどのような笑いを好むのか，また何のために冗談を言うのか。こういった点で学習者に注意を喚起するだけでも十分効果的なはずである（cf. House & Kasper, 1981）。2.2 で述べたように, 英語話者は改まった場面であっても, 緊張をほぐすために冗談を好むが，日本人はそれを不真面目であると解釈するかもしれない。こういった聞き手の誤った解釈に起因するコミュニケーション上の誤解は記述的な指導で少なくとも一定程度までは避けることが可能であろう。

同じことは話し手側の誤解にも言える。英語の母語話者が，日本人の聞き手に対し，相手の緊張をほぐそうと冗談を言った場合を想定してみよう。日本人は上述のように，改まった場面であればそれを不真面目と解釈するかもしれない。さらに，その冗談が「世界一面白い」ジョークのように日本人にとっては不謹慎であると感じられるものであった場合，日本人の聞き手は不快感をあら

わにするかもしれない。そのような場合，そういった反応は，話し手にとって決して気持ちのよいものではない。相手のためを思って言った冗談に対して望む反応が得られないからである。さらに，自分では面白いだろうと思って言った冗談が受けないという状況はそれだけで単純に不愉快と言える。ただし，これは日本人が特定の状況で冗談を好まないということ，冗談の内容が文化的に受け入れられないということに起因するものであり，話し手の相手への配慮が拒絶されたわけでないことを話し手は理解する必要がある。相手のためを思っての言動が否定された場合，そこには 2.2 で触れた透明性の錯覚も深く関わってくるため，話し手は自分の意図が聞き手に十分に理解されているはずだと思い込む傾向があり，その反動も大きくなると予想できるからである。こういった誤解を避けるためには，起点言語と目標言語の文化において笑いの受容にどのような違いがあるのかを学んでおく意義は大きいに違いない。

謝辞

2018 年 3 月に成城大学社会イノベーション学部を退職された宮沢栄次教授はその卓越したユーモア感覚で職場のムードメーカーとしても多大な貢献をしてくださっていた。その中でも，特に，宮沢教授が常日頃から好まれていたダジャレは本小論およびその基となった全国語学教育学会・第 44 回年次国際大会（2018 年 11 月 23 ～ 26 日　於　静岡コンベンションアーツセンター）における論者が担当のフォーラム（‘Should L2 Pragmatic Usage of Jokes Be Taught?’ 2018 年 11 月 24 日　Scott Gardner（岡山大学）氏，古関公子氏（成城大学）と共著）で論者の担当箇所のテーマを着想するきっかけとなっている。ここに記して感謝申し上げる。なお，本小論と上記のフォーラムは JSPS 科研費 JP16K02934（研究課題「ポライトネス指導のための日英対照ユーモア研究」基盤 C 代表 川村晶彦）および平成 30-31 年度成城大学特別研究助成（研究課題「発話行為理論再考―コミュニケーション参与者の期待について」，研究代表者川村晶彦）による助成を受けている。

注

1）いわゆる「日本文化」あるいは「西洋文化」と呼ばれるものの中にも様々なレベルと異なる単位が存在し，決して一様なものではない。ただし，本小論では文化そのものを対象としないため，便宜上そのように呼ぶ。

2）サカモトとサカモトの序文には次のように定義されている：「相手に対して礼儀正しく丁寧に（Polite）振る舞おうとする際に，その言動の根拠となる考え方」（2004: i）。ポライトネス研究では「丁寧」はむしろ敬意（Deference）に近く，‘Polite’ とは異なる概念であるが，ここではその違いについて深く立ち入らない。

3）松本（2014）はポライト・フィクションに相当する文化変形規則（Cultural Transformational Rule（CTR））を提唱し，やはり日米の CTR が異なる例として緊張と弛緩という対立を挙げている。

4）大島は「ユーモア」と ‘humour’ を区別せずに「ユーモア」について語っているが，日本には「ユーモア」に相当する語がないとも述べており（2006：1），ここでの「ユーモア」は ‘humour’ を指すと考えてよいであろう。

5）日本に humour が全く存在しないというわけではないであろう。かつては山藤彰二といった風刺漫画家が活躍した時期もあるようである。

6）厳密には，「一番面白い」ジョークというよりは，最も多くの票を集めたジョークというのが正確であるが，ここではそれでもやはり世界で最も許容度の高いジョークということで，考察の対象とする。

引用文献

板場良久（2010）「文化を定義することの困難さ」in: 池田理知子編著『よくわかる異文化コミュニケーション』京都：ミネルヴァ書房

大島希巳江（2006）『日本の笑いと世界のユーモア―異文化コミュニケーションの観点から』京都: 世界思想社

岡本真一郎（2013）『言語の社会心理学』東京: 中央公論社

松本青也（2014）『新版 日米文化の特質―価値観の変容をめぐって』東京: 研究社

Brown, P. & Levinson, S.（1978）*Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge: Cambridge University Press

Colston, H.L.（1997）‘Salting a wound or sugaring a pill: The pragmatic functions of ironic criticism’ in: *Discourse Processes* 23, 25-45

Dews, S. & Winner, E.（1995）‘Muting the meaning: A social function of irony’ in: *Metaphor and Symbolic Activity* 10, 3-19

Gilovich, T., Savitsky, K. & Medvec, V.H.（1998）‘The illusion of transparency: Biased assessments of other’s ability to read one’s emotional status’ in: *Journal of Personality and Social Psychology* 75, 332-346

Gu, Y.（1990）‘Politeness phenomena in modern Chinese’ in: *Journal of Pragmatics* 14, 237-257

House, J. & Kasper, G.（1981）‘Politeness markers in English and German’ in: F. Coulmas ed. *Conversational Routine*, The Hague: Mouton,157-186

Kess, J. F. & Hoppe, R. A.（1981）*Ambiguity in Psycholinguistics*, Amsterdam: John Benjamins

Laughlab（2002）‘The Scientific search for the world’s funniest joke, final report’ Available at: https://richardwiseman.files.wordpress.com/2011/09/ll-final-report.pdf（アクセス日 2018 年 6 月 23 日 14：22）

Leech, G.N. & Thomas, J.（1987/91）‘Pragmatics and Dictionary’ in: *Longman Dictionary of Contemporary English*, 2nd edition,（1991）, Harlow: Longman, F12-13

Matsumoto, Y.（1988）‘Reexamination of the universality of face: politeness phenomena in Japanese’ in: *Journal of Pragmatics* 12, 403-426

Miller, G. A.（1974）‘Psychology, language and levels of communication’ in: A. Silverstein ed. *Human Communication*, New York: John Wiley, 1-17

Sakamoto, N. & Sakamoto, S.（2004）*Polite Fiction in Collision: Why Japanese and American Seem Rude to Each Other*, Tokyo: Kinseido

Thomas, J.（1983）‘Cross-cultural pragmatic failure’ in: *Applied Linguistics* 4/2, 91-112